

昭和61年度演習林年報

<https://doi.org/10.15017/18577>

出版情報：年報（九州大学農学部演習林年報）。1986，1987-12-25．九州大学農学部附属演習林
バージョン：
権利関係：



は し が き

最近、全国演習林の利用効率の向上を計る意味から、演習林の共同利用、相互利用が強く検討されている。行政改革という、行政的立場からの推進事項であるだけに、何となく、組織や制度だけの変革が望まれているような気がするのであるが、果たしてそれだけのことであろうか。

われわれはよく、見学や調査のために各地を訪れるのであるが、その場合の動機をふりかえてみると良い。「そこに 魅力ある森林があり、比較すべき内容の森林があるから訪れたい」と思うはずであり、訪れやすい制度があるからということとは二の次ぎのように思われる。

魅力ある森林とは、自然・人工、優良・低位の区分は別として、とにかく特長ある森林であることがポイントである。また、同種の森林、たとえば、同じスギ林であっても、環境が異なるところで、どのような様相の林形が成立しているかが興味の対象である。要は、様々の林形、林種、そして環境のところに、数多くの森林が、しかも、広い面積で用意されていることが第一と考えられる。

このように考えると共同利用、相互利用の根本も、案外、地道なところに存在するように思えるのであるが、如何なものであろう。

演習林年報も、このような地味な面を背景とした広報が大切に思われる。

行政改革の動きのなかで、森林と広い空間を忘れない方向性が年報のなかからも伺いえられれば、幸いである。

昭和62年10月

演習林長 竹 下 敬 司